

室戸ジオパーク（再審査） 現地調査報告

【日程】2014年12月1日（月）～12月4日（木）（実質的な審査日は12月2・3日）

【審査員】

大野希一（日本ジオパーク委員会委員）

鳥越寛子（日本ジオパークネットワーク：糸魚川ジオパーク）

片山 彰（日本ジオパークネットワーク：阿蘇ジオパーク）

【主な参加者（所属）】

小松幹侍（推進協会長・室戸市長）、岩井雅夫（推進協顧問・高知大学理学部教授）、植田壮一郎（推進協理事）、米澤善吾（推進協理事）、依光香代子（高知県観光振興部地域観光課チーフ）、堅田栄一（県立室戸高等学校校長）、中屋秀志（市教育次長兼学校保育課長）、見津田秀賢（市教育委員会 学校保育課指導主事）、松浦雅人（国立室戸青少年自然の家主任）、島田信雄（市観光協会会長）、富岡一成（市商工会専務理事）、宇賀俊六（共同キラメッセ室戸(有)代表取締役社長）、山村邦夫（むろと海野食の会会長）、長野真司（室戸食遊館808会長）、山下福恵（市連合婦人会会長）、堺喜久美（市観光ガイドの会副会長）、山内雅史（エフビットコミュニケーションズ室戸支店長）、南 裕美（ウトコオーベルジュ&スパ）、千頭利智（推進協ジオツーリズム推進チーム）

（事務局）

和田康治（推進協事務局長・市ジオパーク推進課長）佐竹一浩（市ジオパーク推進課長補佐／県出向）、柚洞一央（推進協地理専門員）、白井孝明（推進協地質専門員）、古澤加奈（推進協国際交流専門員）、眞土浩子（市ジオパーク推進課）

【見学地点】

キラメッセ鯨館・ジオパークインフォメーションセンター、室戸世界ジオパークセンター、アクアファーム、室戸岬、岬インフォメーションセンター、室戸青少年自然の家、吉良川まちなみ、ダイドー・タケナカ、新村遊歩道

【現地審査のまとめ】

室戸ジオパークは、フィリピン海プレートの沈み込みに誘発される巨大地震と津波、そして付加体運動に伴う地盤の隆起が造りだした景観と、それらを利用してきた人々の関わりが体感できる世界ジオパークである。平成23年のGGN加盟以降、室戸ジオパークを訪

れる観光客は増え、地域住民がジオパーク認定の効果を実感した。さらに平成 24 年に行われた第 3 回日本ジオパーク全国大会の開催をきっかけに地域住民の結束はさらに強まり、地元の有力企業や商店、宿泊関係者、メディア関係者等、地域が一丸となってジオパークを活用するなど、ボトムアップ型の地域振興が実現しつつある。またこれまで大きな課題とされていたジオパークとしての拠点施設についても、平成 27 年 4 月末のオープンが決まり、地域住民のジオパークに対する期待は大きく高まっている。

その一方で、室戸ジオパークの長期的ビジョンを示したアクションプランがない事や、地域内の明確な情報共有の仕組みがない事、南海地震とそれに伴う津波の発生が懸念されるにもかかわらず、子供たちに対する系統的な防災教育が十分に実施されていない事は課題である。また、地域住民と協議会との信頼関係を構築し、現在の室戸ジオパークの礎を築いてきた協議会専門員の置かれている雇用条件は不安定であり、改善が望まれる。

1) ジオサイトと保全

平成 23 年 4 月、ジオサイトに指定され、かつ国の名勝にも指定されている斑レイ岩の転石への落書き事件がおきた。この事件に対し、行政担当者が連携して速やかに現状復帰を行ったとともに、会長が地域遺産の保全に対する毅然とした態度を見せた。ジオサイトになっている天然杉の巨木群は、四国森林管理署と室戸市との協定に基づいて、地域住民が主体的にそれらの保護と利活用を推進している。台風襲来時等に海岸に打ち寄せられる大量の漂着物の清掃活動も、住民と行政が一緒になって定期的に行われ、官民一体となった地域遺産の保全が進められている。

2) 教育・研究活動

協議会は、大学生を対象としたインターンシップや、大学の野外実習および卒論生の受け入れなど、室戸ジオパークを研究する人材を積極的に受け入れている。また高知大学、JAMSTEC、高知工科大学等の学術研究機関と連携協定を結び、質の高い研究活動を実施する環境を整備した。高知大学では新しい拠点施設「室戸世界ジオパークセンター」内にサテライトラボの設置を予定しているほか、学内に将来の地域の担い手を育成する部門を設置する計画もあり、実質的な官学連携が進んでいる。

地域教育としては、室戸青少年自然の家と協議会専門員が連携したサマースクールの定期開催や、主に子供たちを対象とした「まがりラボ」などのイベントが行われた。県立室戸高校は、全国に先駆けて「ジオパーク学」という科目を設置し、活発な活動を続けている。しかし現時点では、室戸市内の全ての小中学校でジオパーク学習が行われているわけではない。

3) 管理組織・運営体制

協議会に所属する3人の専門員の献身的な取り組みにより、協議会の活動は他の類を見ないほど活発である。現在室戸市役所内にある協議会事務局および室戸市ジオパーク推進課は、新規拠点施設内に移転し、そこで室戸市観光協会およびガイド団体と共に事業推進に当たることになっており、ジオパーク関係者間のさらなる連携強化が期待される。

一方で、室戸ジオパークの長期的アクションプランが策定されていない。また、事務局移転によるジオパーク関係者の外部との情報共有不足、孤立化が懸念される。さらに、室戸ジオパークの発展に尽力している協議会専門員の雇用が単年度契約であるなど、今後の持続的活動には不安がある。専門員の待遇、雇用条件についてはできうる限り考慮されなければならない。

4) 地域の持続可能な発展とジオツーリズム

GGN加盟による訪問客の大幅な増加、第3回日本ジオパーク大会の開催などが地域住民のモチベーションを上げ、相互連携を深めるきっかけになっている。地域住民が気軽にジオパークの活動に参加できる仕組みを作っているため、若い世代を含む多くの住民が無理なく主体的にジオパーク活動に参画している。地元の有力企業もジオパークに対して協力的で、ボトムアップ型で持続可能な地域振興が実現しつつある。ガイドについては、独自の小道具を駆使したノウハウが共有されており、一定レベルのサービスが提供できている。そのガイドの活躍が、次なる地域の担い手の育成に大きく貢献している。さらに、ガイド団体が自主的に運営を行っている点も評価される。

5) 国際対応およびネットワーク活動

協議会専門員と地域住民が連携し、外国人観光客のために地震・津波発生時の避難方法や食事のメニューを多国語化するなど、ジオパーク内の国際対応は進みつつある。その一方で、ジオサイトに設置された解説板は平成23年度以降の新規設置がないほか、系統的な板面の貼り替えも行われていない。ジオパーク全体のストーリーの再構築と解説板の計画的な整備を並行して行い、世界ジオパークに相応しい国際化を進める必要がある。

室戸ジオパークで行われているボトムアップ型の取り組みは、JGNの中でも先進的であり、特にガイドの育成や地域住民と行政が協働する枠組みを造り上げたプロセスは他のジオパークにとっても大いに参考になる。国内外の世界ジオパークとより一層交流を進め、室戸ジオパークの取り組みを積極的に発信してほしい。

6) 防災・安全

ガイドは地震と津波発生時における避難路の確認と避難訓練を定期的を実施しており、顧客の安全確保への対策がなされている。海岸沿いのジオサイトを巡る遊歩道の整備も進み、多くの顧客が安心・安全に室戸ジオパークを周遊できる仕組みができつつある。しかし、地域の防災教育にジオパークが活用されているとは言い難い。また、新たな拠点施設は津波発生時の浸水域に当たることから、避難路の整備や備蓄食料の確保が望まれる。

以上